

〔5番 横田川秀美さん登壇〕

○5番（横田川秀美さん） おはようございます。
緊張して胃がちょっとキューキューしております。
横田川秀美です。よろしくお願いたします。
質問させていただきます。

教育における地域差について。市内には18の市立小学校、7の市立中学校があるが、児童数が多い学校もあれば、少ない学校もあります。少人数の学校ではクラス替えがないまま卒業を迎えたり、中学校では部活動の数も限られたりします。学校にやりたい部活がないため学校外のクラブチームに入る場合もあるが、親の負担も多いため、共働き、核家族、片親などの事情により仕方なくほかの部活に入るしかない生徒も少なくありません。地域格差が問題となっている今、せめて教育は全ての国民は法律の定めるところにより、その能力に応じて等しく教育を受ける権利を有すると憲法第26条でうたわれているように、子どもたち一人一人に平等であってほしいと一母親として強く思います。そのような観点から、以下伺います。

(1) クラス替えがなければ、小学校では6年間という長い時間を同じ子どもたちとともに過ごすことになる。いじめや不登校などの問題が起こったときに、どのような対応をされているか。

(2) 中学校になると、学業とともに部活動に力を入れる生徒も出てくる。神座小ではスポーツ少年団としてサッカーがあるにもかかわらず、進学先の北中にはサッカー部がないため、サッカーができない。署名運動などが行われていても、一向に動きがない。静岡県はサッカーの盛んな地域であり、小学校ではできて中学校ではできないというのはもったいなく感じる。

(3) 北中はパラリンピックでも活躍する有名なバスケットボール選手藤本怜央氏の出身校であるが、男子バスケットボール部はなくなったままであり、サッカー部同様、これももったいなく感じます。

次に、2の質問です。高校教育、そしてその先について。

市内中学校卒業者の多くは市内の高校へ進学している。また、同時に市外の高校へ進学する生徒も多い。島田市の将来を考えると、若い世代が島田市に定住したくなるまちづくりが必要となってくると思う。やはり島田市がいいと思ってもらえることが大切だと思う。しかし、高校卒業後は市内に進学先がないため、どうしても市外へ出るしかない。島田市内に学ぶ場所を揃えることで、人口流出が少しでも防げて、さらに人口も増えるのではないかという観点から、以下伺う。

(1) 市内中学校卒業数と市内にある高校の定員はどのようになっているか。また、市内中学校卒業者が市内高校へ進学する割合はどの程度か。

(2) 学業を通じて市内にとどまってもらえたり、将来的に戻ってきてもらえたり、人を呼んでくれるような工夫はされているか。

(3) これから先、島田市のために高校からの進学先を市内に用意する考えはあるか。

以上、よろしくお願いたします。

〔5番 横田川秀美さん発言席へ移動〕

○議長（紅林 貢議員） 染谷市長。

〔市長 染谷絹代登壇〕

○市長（染谷絹代） では、横田川さんの御質問にお答えをいたします。1と2の(1)、2の(2)については教育長から答弁をさせ、2の(3)については私から答弁を申し上げます。

では、最初に2の(3)の御質問についてお答えをいたします。新たな大学等の設置や学部の新設は、少子化が進み、全国的に大学の適正数が議論されている中で、国の許認可が得られにくい状況となっております。また全国の事例を見れば、大学誘致に際し土地、建物及び機器、備品等について地元自治体が提供または財政支援をしている実態がございまして、誘致するには多額の負担が見込まれます。現在、島田市には大学が立地してい

ないものの、通学可能な浜松市、静岡市、藤枝市、焼津市などに大学が点在することから、市内に大学を誘致しても、それが直ちに定住人口の増加につながるとは考えにくく思っております。むしろ高校や大学を卒業した若い人たちに選ばれる島田市とするために、さまざまな角度から施策を打ち出し、島田市の魅力を高めていくことが重要であると考えております。

以上、御答弁を申し上げます。

なお、再質問につきましては教育長または担当部長から答弁をさせますので、よろしくお願いを申し上げます。

○議長（紅林 貢議員） 濱田教育長。

〔教育長 濱田和彦登壇〕

○教育長（濱田和彦） 市長に続き横田川さんの1の(1)の御質問にお答えします。現在、市内小・中学校では複数の学級がある学年では、毎年クラス替えを行っています。しかし、1つ学級しかない学年ではクラス替えができませんので、同じクラスメートと長い期間、ともに過ごすこととなります。少ない人数の中で何か問題が発生した場合は長期化するおそれがありますが、小規模な学校では他学年や他学校との交流を行うなど、人間関係を広げるためのさまざまな取り組みを行っています。島田市では不登校児童・生徒への対策として、教育センターにあるチャレンジ教室や不登校児民間指導教室、スクールソーシャルワーカーなどを活用し、学校に戻れるようなきめ細やかな支援を実施しております。

次に、1の(2)と(3)については関連がありますので、一括してお答えします。中学校では、学業ばかりでなく心と体を育てるための部活動はとても重要な役割を果たしています。特に運動部については種目が多岐にわたるため、どの種目を設置するかは各学校の実情によります。各学校では、生徒数が年々減少している中、生徒の希望状況や指導者数、練習場所などを総合的に判断して設置

を決めています。学校規模によっては、部活動の数を増やし過ぎると指導者の確保やチーム編成ができなくなってしまうこともあるため、団体種目では合同チームの設置が認められており、個人種目においては部活動がなくても大会への参加ができるようになっています。教育委員会と島田市としましても、部活動の外部指導員の確保に努めるなど、今後も引き続き各学校と連携する中、部活動の充実に取り組んでいきたいと考えております。

次に、2の(1)の御質問についてお答えします。平成26年度末に市内7校の島田市立の中学校を卒業した生徒数は848人です。市内の高校の平成27年度入学者選抜時点での定員は、島田高校が240人、島田工業高校が240人、島田商業高校が200人、金谷高校が140人、島田樟誠高校が280人、計1,100人となっています。また、平成27年度に附属島田中学校を除く中学校卒業者が市内高校に進学した割合は47.6%となっています。見方を変えれば、市外からも多くの学生が島田市内の高校に通学している状況があります。こうしたことから、島田市に住む高校生だけでなく市外から通ってくる高校生の力も活用して魅力的なまちづくりをしていくことが大切だと考えております。

次に、2の(2)の御質問についてお答えします。島田市では地域での職業体験やボランティア活動等の体験活動を通して、地域を知り、地域から学ぶとともに、人に役立つ行動のできる力を育てています。また、特色ある教育活動として和文化教育や地域活動にも取り組んでいます。具体的には、市内全校でお茶についての学習に取り組んでいるほか、北中では年末の門松づくり、相賀小では相賀谷太鼓、川根中では笹間神楽などの伝統芸能といった学校独自の取り組みもあります。また、教員自らが小学校社会科の副教材「私たちの島田市」を作成し、島田市の産業や歴史について学習することで、自分たちの住んでいる地域を理解し、郷土を愛する心を育もうとしています。ふるさと島

田に愛着を持った子どもたちが成長することで、島田市に定着する人口が増えていくものと期待しています。

以上、答弁申し上げます。

なお、再質問については担当部長から答弁させる場合がありますので、よろしく願いいたします。

○議長（紅林 貢議員） 横田川さん。

○5番（横田川秀美さん） 再質問をさせていただきます。

現時点でやりたい部活動がない生徒は、クラブチームに行くか、諦めてほかの部活に取り組むか方法がないのでしょうか。

○議長（紅林 貢議員） 濱田教育長。

○教育長（濱田和彦） 今言ったように、クラブチームに参加する、または違う部活に参加する以外では、例えば北中にない部活が一中、二中にある場合は学外通学という形をとって、他の学校で希望する部活に入ることができるようになっております。そういうような制度も持っています。

以上です。

○議長（紅林 貢議員） 横田川さん。

○5番（横田川秀美さん） ほかの部活に通うというのは、学校全部を転校するとかではなくて部活だけのことでしょうか。

○議長（紅林 貢議員） 濱田教育長。

○教育長（濱田和彦） 部活だけということではなくて、学校そのものを転校するという形をとります。

以上です。

○議長（紅林 貢議員） 横田川さん。

○5番（横田川秀美さん） そうなると、ただでさえ生徒数の少ない田舎の学校、そういう学校の生徒がますます流出してしまったりとかして、生徒数が減っていったりしてしまうのではないかとちょっと地域住民としては心配になってしまいます。また、そうやって選択肢のない中を育った子が、

将来地元に戻ってこようか考えたときに、やはり都会のほうが子育てに対してはいいのかと思われてしまうのではないかと心配になります。本格的な部活動も大切ですが、田舎であっても興味のある分野に取り組めることが大切な時期ではないかと考えますが、その点、市長さんはどうお考えでしょうか。

○議長（紅林 貢議員） 染谷市長。

○市長（染谷絹代） 突然の振りでありありがとうございます。子どもたちがより選択肢の幅の広い環境を用意するという事は大事でございます。しかし、小規模校はマイナスばかりではございません。もう一つは、例えば小学校においても保護者がクラブ活動の指導者をして力を入れている小学校もたくさんございまして、ぜひとも地域の方々の力を持っていただいて指導者を選んでいくということもこれからはあるのかと思います。そして北部の中学校、具体的に言えば北中でございますが、これは個人プレーはその個人で競技会にも中体連にもいろいろ出られるのですが、団体としてはやはりクラブの競技メンバー、サッカーならサッカー、野球なら野球ということの人数が維持できないためにやれない。ただ、野球などは北部の川根中学校と連携して野球大会等にも出ておりますので、そのあたりのところは市民の保護者の皆様、そして子どもたちの希望というのをかなえていかなければならないと思っています。ただ、一方、子どもが少ないところだけでなく多いところでも、指導する先生の負担というのも大変に多くなっておりまして、昔のように土日も全てなしに指導に打ち込むということもなかなか難しい現状にあるということで、クラブ活動自体の議論というものがこれから盛んになっていくかと考えております。

○議長（紅林 貢議員） 濱田教育長。

○教育長（濱田和彦） 市長に続いて少しお話をしたいと思います。子どもたちの選択の多様性ということは大変必要だと思います。いろいろな選択

肢の中から自分の好きなことを選ぶということは大事だと思っていますが、一方で、その充実ということも考えていかなければなりません。

例えば北中を例にとりますと、10人の教員が6つの部活を指導しております。これは大変厳しい状況があります。それと言いますのは、例えば大会に出ていったときに、大会役員として出る先生、それから子どもたちを指導する先生、最低でも2人いることが望ましいと考えております。そういう中で10人で6つの部活を指導するということはなかなか厳しい状況がありますから、これをさらに増やすということについては、相当な負担を学校に強いることとなります。そのために、もし増やすのだったら何かを減らすということを考えていかなければなりません。先ほど私は壇上でも答弁したように、いろいろな条件を考えながら、学校、PTA、子どもたち、そういう中で総合的に部活の設置については考えていかなければなりません。

以上、答弁申し上げます。

○議長（紅林 貢議員） 横田川さん。

○5番（横田川秀美さん） 答弁、ありがとうございました。

先ほどの人数の確保という面では、本当にちょっとローカルな話になってしまうのですが、北中ではサッカー部が15年ぐらい前から署名活動とかをしておりまして、よく言われる継続的に人数が集まらないのではないかということに関しては、小学校のスポーツ少年団もあるので大丈夫ではないのかと個人的には思ってしまうのですが、やはり教員の数が足りないというところはとても理解できます。先ほど市長がおっしゃったように、保護者のほうで指導者をという話があったのですが、例えばそうなったときに、学校側としてはそれはオーケーというか、どういう形が例えばできるのか。

○議長（紅林 貢議員） 濱田教育長。

○教育長（濱田和彦） 実際には島田市の場合は24人の外部指導員を部活動のほうに入れて活用しています。ですから地域の方々が部活動にかかわっていることはこれは事実ですが、中体連のほうの規約というのですか、それからしますと、引率は教員でなければできません。監督も教員でなければできません。そういうような幾つかの制約があります。ですから、外部指導の方、地域の方たちだけで部活動の維持というのですか運営というのはいかならないことは御理解いただきたいと思っています。

○議長（紅林 貢議員） 横田川さん。

○5番（横田川秀美さん） はい、わかりました。そうしたら、その場合、そういうことをやりたいという場合は、やはり学校のほうに要望を出すほうがよろしいのですか。市の教育委員会なのか学校なのかというのがちょっと気になりました。

○議長（紅林 貢議員） 濱田教育長。

○教育長（濱田和彦） 今おっしゃったとおりに学校の実情に応じて判断をいただいているものですから、教育委員会が判断するのではなくて学校の判断に任せています。

以上です。

○議長（紅林 貢議員） 横田川さん。

○5番（横田川秀美さん） はい、ありがとうございました。島田市の将来のためにも、全部を今すぐというのはとても大変なことかもしれませんけれども、一要望として、先ほど市長が申していた、ちょっと難しいと言っていた新学校とかの誘致を長い目で見て夢のある方向に考えたいので、ぜひとも御検討をよろしく願いいたします。

質問を終わります。ありがとうございました。